

その手を、力づけるようにジョアンは上から包み込み、

「救い主なるゼズスキリントのお言葉に『デウスの御国は汝らの内にあり』と宣います。我らの信仰に、形ある祈りの相手は要りませぬ。どこにいても、心より祈りを捧げるものはただデウスのみ。デウスに立ち帰り、このはかなき世界を厭いなさい。さすればあなたのアニマは安らぎを得ましょう。外なる事を捨て、内の事をもつばらにする道を習えば、デウスの御国が来たり給うのを見られましょう。何故ならば、デウスの御国は、息災とスピリツサント（聖霊）より生じるものであるゆえです。あなたの内に相応の御居所を調えたならば、ゼズスキリントがそこに来たり給い、御身の悦びを覚えさせ給うでしょう。御主の御威光と御慈しみは内なる心であり、またそこにおいて御感応を成し給うのです」

そう諭して、ジョアンはまたにこりと微笑んだ。

「そんなん、うちにできるやろか」

「このはかなき世界を厭い、己が内を清め、正しく生きるならば、その道は守られます。今生においてはデウスのガラサ（恩寵）をもつて息災なる日々を、来世においては大いなるグラウリヤ（栄光）をもつて、あなたのアニマが救われますように」

ジョアンの前に、たえはうなだれた。その様子に、

心動かされるものがありながら、東次郎はなおも抵抗を試みた。

「儂はあかんで。毛利の殿さんは、天主教がお嫌いや言うとするやないか。村上のお代官様かて、今は大友の殿さんと仲がようて、パーデレさんにもお咎め無しやけど、いつまた毛利さまにお味方するかわからへん。そうなたら、天主教を信心しとる言うたら睨まれるで。こういう商売はな、あつちやにもこつちやにも、ええ顔しとかなあかんのや」

たえは、東次郎を振り向いて

「それはわかつとる。そやから、お前さまがあかんのやつたら、うちだけでもええさかい。うちの好きに信心させといて」

「そやつたらええけどな」

なおも困り顔の東次郎に、たえは畳みかけて言った。

「それからな、うちは決めたで。宿はもう、おなごに客取らすのやめるさかい」

「えええっ！」

東次郎は、今度こそ心底たまげた。

「円やは清い宿にするんや。湊の客引きもやめる。今おるおなご衆はみんな女中にして、給金もきつちり払う。それで、里に帰りたいたい子がおつたら去なしてあげたって」

「そやけど、ぬし、そないなことしたら宿の稼ぎがなあ」

「それは心配無用や」

たえは、にこりと笑った。

「天主教いうんは、ほんまにええ教えや。これからもつともつと信心する人が増えるで。そしたら、パーデレさんも忙しいなって、船であちこち行くお方が増えるやろ。円やが天主教の女将がおる宿やて広まったら、パーデレさんも安心して、ぎようさん泊まってくれるようになるわ」

「おたえ、ぬしは……」

東次郎は、しばし呆然とたえを眺めた。控えめで、何も言わず自分に従うと思っていた女房が、いつの間にか、別人になっってしまったようだった。

それから毎日、たえとさきは暇をみてはジョアンからキリスト教の教理について学んだ。東次郎は「お客さんの邪魔にならんようにせえ」

と言うだけで、たえの好きにさせていた。たえの熱心さに、何事か思うところがあるようだった。

「たえさんは字が読めますか？」

とジョアンに聞かれたので、たえは簡単な漢字と仮名なら読めると答えると、ジョアンは「パアテル・ナウステル」やアベマリヤ（天使祝詞）の祈り

など、毎日捧げるべき祈りの言葉と、スキリツウラ（聖書）の要約を、ひらがなで書き写してくれた。

「難しい言葉や意味のわからぬ言葉があっても、毎日読み、唱えなされるように。いつか、心にしみておわかりになる時がきます」

とジョアンは言った。

そして、どうにか頭痛が癒えたカブラルから、旅先として略式ながら、たえとさきは洗礼を受けた。カブラルは、欧州の感覚でいうところの「娼婦」が行いをあらため、神の道に入ったということ、そう機嫌は悪くなかった。

洗礼名として、さきには「マグダレナ」、たえには「ベアトリス」が与えられた。

「ベアトリスは『果報』なる意味です」と、ジョアンはたえに説いた。

「御主なるデウスが天より降り給うたことは、穢れたる世界の人々のために光を照らし給うて、人の迷いを晴らし、真実の果報の極みを教え給わんがためです。世の人は、福徳の栄華を極めた者を果報者と言っております。されど、これは誠に塵芥のごときもの。財宝や位階をみだりに望むことは、真実の果報を極めるためには障壁となることの方が多いのです」

「真実の、果報でございますか？」

聞き返したたえに、ジョアンはうなずき、

「我らの果報とはただ、デウスの御事と善徳を観念し奉ること。この観念の内、己が身に覚ゆる悦びは、今生の楽しみに比べれば天地雲泥の差というも愚かでありましょう。真実の快樂を、穢れた世なる今生に望むことはできません。この果報を抱いて天の御国に召された者だけが、来世の快樂に浴するこ

とができるのです」
たえは、与えられた名をかみしめるように、両手を胸に当てた。その姿を、隣でさきが微笑んで眺めていた。

そして、カブラルとジョアンが「円や」に来て八日が過ぎた朝。

「堺行きや！ 堺行きの船が出るぞー！」

船頭さへえの声に促され、カブラルとジョアン、さえの三人は船に乗り込もうと「円や」を出た。さえは、ジョアンらと共に堺に行き、そこの信徒の講に入るようになった。

「おたえさん、これあげるわ」

さきは、懐からクルスを出して、たえに手渡した。

「おさきさんは、かまへんの？」

「うちは堺に行ったら、またもらえるわ。おたえさ

んはここで、「一人で信仰していかなあかんのやから、持つとき」

「おおきに」

たえは素直に言つて、クルスを首から下げた。それを見たさきは、少しいたずらっぽく微笑みながら、「もうお別れやし言うけどな。うち、あんたのこと、ちよつとだけ妬ましかつたんや。あんた、旦那さんに大事にされてたさかいな」

「うちもや」

たえは言い返し、二人は顔を見合わせて笑つた。「京よりの帰路にまた寄ります。その折にもつと教本をお持ちしましょう、おたえさん」

ジョアンは言つて、たえの手を握つた。

「先日、あなたが仰つたことは正しい。これから我らの友は日本中、あちこちの国で増えましょう。それが我らの務めでもありますゆえ。そうなれば、この宿の客も増えましょう。されどそれは、あなたの信心次第でもありません。あなたが一粒の種となりなさい。天の宮を建てる土台の岩となりなさい。そしてこの島々、海の上すべてが、デウスの大いなるグラウリヤにて満たされんことを」

祝福の言葉を受け、たえは頭を垂れた。朝の陽射しが、波頭にきらきらと輝いて、その反射が、たえの胸元に下がった銅のクルスを、ちらちらと鈍く光

らせた。傍らの東次郎は、そのクルスを、何か眩しいものを見るように、目を細めて眺めていた。

天正十三年（一五八五年）、キリシタン大名の小西行長が、小豆島・塩飽・室津を領有したことから、瀬戸内の島々はキリシタンの一大本拠地となった。しかし、その後の豊臣秀吉によるバテレン追放令、さらに江戸幕府のキリシタン禁制により、キリシタンは排斥されていく。

塩飽勤番所に残る文書によると、たえが信徒となつてから約百年後、寛文九年（一六六六年）の記録に「吉利支丹ころびにても御座無く候」とあり、また宝永五年（一七〇八年）にも「転び吉利支丹類族の者、塩飽に前々より御座無く候」と記される。

改宗したキリシタンは以前から一切いないというのだ。激しい弾圧により棄教したのか、あるいは潜伏して「隠れキリシタン」となり、そのまま絶えてしまったのか。百年のうちに、信仰の軌跡は失われてしまった。波間に蒔かれた一粒の種は、花を咲かせ、実を結ばんとしながら刈り取られてしまったのである。

（了）

（以上5月23日放送分）